

# 女子大國文

第百六十一号

平成二十九年九月発行

女子大國文 第百六十一号

平成二十九年九月発行

京都女子大学国文学会

彙報……………(六五)

「チヨロギ」の弁……………八木 意知男(五七)

菅原道真の子息をめぐる二、三の問題……………滝川 幸司(二二)  
—阿視と高視・淳茂の左遷その他—

二〇一七年度公開講座  
憶良の後ろ姿—筑前国志賀白水郎歌左注考—……………廣岡 義隆(一一)

## 女子大國文

第百六十一号

平成二十九年九月十五日 印刷  
平成二十九年九月三十日 発行

〒605-8582 京都市東山区今熊野北日吉町三番地  
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一-九〇七六  
FAX 〇七五-五三一-九二二〇  
振替 〇〇〇-一五一-三二一四

〒603-8404 京都市上京区上長者町通黒門東入  
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四一四-一〇八代  
FAX 〇七五-四三三-六二八二

京都女子大学国文学会

# 彙報

先生がお務めです。江富範子先生、山中延之が運営委員を務めます。

○女子大國文第一六一号をお届けします。

○優秀論文発表者の卒論要旨・卒論体験記、さらに優秀論文発表会および春季公開講座の感想文を掲載しました。

## 研究室だより

○本学科教授をお務めになりました井手至先生が逝去されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

○本年三月末をもって、豊島修先生が定年退職なさいました。これからも御健康に留意され、いっそう御活躍くださいますよう、学科一同心よりお祈り申し上げます。

○四月より新任として池原陽斉先生をお迎えしました。御専門は万葉集です。本号に御就任の御挨拶を戴きました。

○昨年度一年間京都大学において国内研修をされていた大谷俊太先生が、この四月よりお戻りになりました。

○替わって山崎ゆみ先生が四月一日より大阪大学での一年間の国内研修に出ておられます。

○本年度の文学部国文学科主任兼国文学会代表幹事は峯村至津子

## 二〇一七年度国文学会行事（前期）

○新人生オリエンテーション

四月五日（水）午後一時より 於J224教室

○優秀論文発表会

五月十三日（土）午後一時より 於J420教室

（卒業論文）

・狂言「比丘貞」の笑い

―名付けと小舞「鎌倉の女郎」を中心に― 吉田 有希

・中島敦「わが西遊記」の構想

―スピノザの思想との関連― 児島 春菜

・『曾禰好忠集』における述懐表現

―廃屋の表現を中心に― 藤原 静香

・小学校国語教科書における基本語彙 田中悠里子

○春季公開講座（大学と共催）

五月十八日（火）午後二時四十五分より 於J420教室

講題 憶良の生き様―山上憶良を慕う国府官人から―

講師 三重大学名誉教授 廣岡義隆先生

廣岡先生より御講演内容を本号に御寄稿賜りました。

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

六月十七日（土）午後一時より 於音楽棟2階演奏ホール

着付け・囃子に関する解説を拝聴、小鼓・大鼓体験、狂

言『寝音曲』、能『橋弁慶』

感想文は次号に掲載します。

## 池原先生就任の辞

### 着任のご挨拶

池原陽<sup>あき</sup>齊<sup>よし</sup>

この二〇一七年度、国文学科に着任しました池原陽齊と申します。生まれてから昨年度まで、ずっと関東で生活しております。京都へ参る機会といえば、中学の修学旅行と大学の卒業旅行を除けば、学会に参加するために、そここの大学にお邪魔するくらいのものでした。京都は客中行を詠むところ、というのが昨年度までの印象です。

ところが、京都女子大学とご縁がありまして、こちらに住まうことになりました。そのような次第で、今年度は環境に慣れることに精一杯といったところです。しかし、いつまでもこのままではいけませんので、まずは大学と自宅の周辺から始めて、迷子になりつつも、少しずつこちらの地理に詳しくなっていきたいと思っております。

研究に関しては、『萬葉集』を専門にしています。『萬葉集』は和歌集ですが、『古今和歌集』以降の平安時代の和歌集とは、いろいろ違った部分があります。短歌体以外の歌体が比較的多い、枕詞が多用される、掛詞が未発達である、季節と景物の関係が固

定化されていない（たとえば、春なら霞、秋なら霧というような、平安朝以降の和歌で一般的なとなる結び付きが明確でない）など、いくつも相違点を挙げることができます。

しかし、そういった作品の内容以上に、明確に異なる点がひとつあります。それは、この歌集が仮名成立以前の、日本に漢字以外の文字が存在しなかった時代に編纂されたということです。『萬葉集』には、自前の文字のない時代に、先人たちが苦勞しつつも楽しく文字を操っていた痕跡がたくさん残されています。その痕跡を探っていくのが私の楽しみです。仮名主体で書かれた平安朝以降の作品とは異なるよさが、この歌集にはあると思います。

また、『萬葉集』は平安時代以降、鑑賞の対象となっていくわけですが、この漢字だらけの、しかも三十一文字以外の歌体を含む、有り体に言うとヘンテコな歌集は、同時代以降の人々にとっては、なかなか扱いきれない作品であったようです。読めなかったので意識してみたり、読めても「内容が気に入らない」ということもあったらしく、勝手に歌詞を改変してしまったりというようなことがよく起こります。

一方で、平安時代も後期になりますと「大事な古典の萬葉集を尊重しよう」という感覚も生まれてくるらしく、先人が勝手に改

変したものを、『萬葉集』に忠実な形に戻すようなこともしています。この作品に対する、時代ごとのいろいろな見方があることが分かってくると、またそれを知ることにも楽しみになってきます。『萬葉集』は、いろいろな角度から楽しめ、追究することのできる作品です。

その研究成果の一端は、担当している授業でお話ししています。まだ着任してわずかですが、きちんと授業を聞くことができ、疑問を持つことの出来る、しっかりとした学生が多いというのが現在の京女に対する印象です。皆さんの熱意につられて、いついこちらも余計なことをお話ししているかと思いますが、一緒に学んでいければと思っています。

まだ右も左も分からず、学科にも大学にも、学生諸姉にも迷惑を掛けることの多いというのが現状です。どうか、少しずつでも慣れていって、足を引く張ることが少なくなるようにしたいと思います。また、この伝統ある機関誌『女子大國文』にも、早めに論文を投稿して、皆さんのお目に掛けられればと考えています。

狂言「比丘貞」の笑い

―名付けと小舞「鎌倉の女郎」を中心に―

吉田 有希

〈論文要旨〉

狂言「比丘貞」は「枕物狂」「庵梅」と並んで「三老曲」と称され、重く扱われる曲である。「比丘貞」の梗概は以下である。ある者が、息子が成人したため、裕福な老尼のもとに名前を付けてもらいに行く。名前の下に代々太郎と付くと聞き、老尼は自分の住むところがお庵と呼ばれることから「あん太郎」と名付ける。さらに名乗を所望され「比丘貞」と名付ける。酒宴になり、あん太郎が舞い、老尼が「鎌倉の女郎」を舞う。

「名付け」を題材にした狂言は「比丘貞」の他に、「呂蓮」「財宝」がある。「呂蓮」「財宝」が明らかに奇妙な名付けをしているのに対し、「比丘貞」は一見まともな名付けをしているように見える。しかし、付けられた「あん太郎」という名前は京阪の方言で愚か者を指す「あんだら」を想起させるものであると指摘される。この「あんだら」という言葉の例文は近世のものが多く、中に、愚か者という意味で「あんだら」という言葉が存在してい

たか検討する。狂言「吃り」に同じ「庵太郎」という名前の人物が登場している。さらに、天正年間に内容は不詳だが、「アンドン智」という狂言が上演された記録がある。日本最古の狂言台本である『天正狂言本』の中の智物を見ていくと、ほとんどが智を無知で愚直な人物として描いている。以上から、中世でも「あんだら」という言葉は「愚か者」という意味で使われていた可能性が高い。

「呂蓮」や「財宝」等の明らかに奇妙な名付けをする曲では、シテ、アド、観客が奇妙な名前だと共通して理解している。一方、「比丘貞」は偶然におかしな名前になってしまったために、シテ、アドはおかしな名前だと気づいていない。ゆえに、「比丘貞」は舞台上では変わった名付けであることに気づかないまま進行していくが、観客は変わった名付けだと気づいているという「比丘貞」独自の名付けの笑いの空間を作り上げている。

「比丘貞」には、シテの老尼が小舞「鎌倉の女郎」を舞う場面がある。しかし、『天正狂言本』には老尼の舞に「鎌倉の女郎」の指定は無い。「鎌倉の女郎」は艶やかな舞であって、現在、「比丘貞」では脱俗の老女が舞うことに妙味があるとされている。『天正狂言本』に「鎌倉の女郎」の指定がなかったということは、当時は舞に重きを置く曲ではなく、「三老曲」としての「比丘貞

の地位は「鎌倉の女郎」の定着によって完成することを示している。『天正狂言本』に次ぐ一六四二年成立の『大蔵虎明本』『びくさだ』には「鎌倉の女郎」の指定がある。また、一六五一年成立である大蔵虎明の『わらんべ草』七七段には面「ふくれ」が成立したことが記されている。老けた不美人の面「ふくれ」は現在では「庵梅」「比丘貞」に使用される。『わらんべ草』成立時点では「庵梅」は存在していない。「ふくれ」が成立したことは少なくとも虎明の時代には「比丘貞」は特別な曲として扱われていた可能性がある。つまり、『天正狂言本』の成立年から『大蔵虎明本』成立年までに「鎌倉の女郎」の定着化が進んでいったと考えられる。この間の仏教的背景を考えると、「比丘貞」の老尼が「鎌倉の女郎」を舞う場面には、尼に対する皮肉めいた笑いも込められている可能性が高い。狂言との関連性が指摘される『沙石集』を見てみると、ある程度年をとった尼が性的な言葉を使用している説話がある。また、中世に宣教師ルイス・フロイスによって書かれた『日欧風習対照覚書』に、比丘尼の僧院が淫売婦の街になっていたと指摘がある。一休宗純『自戒集』には僧尼の性的な出来事を皮肉る描写もある。さらに、近世初期には歌比丘尼など、もともと仏教を解いていた尼が色を売っていった。このような尼の性的イメージを基盤として「鎌倉の女郎」が舞うこと

は、皮肉めいた笑いを生み出していたのだと考えられる。

#### 〈論文執筆体験記〉

この度は、拙いながら、論文執筆体験記を書かせていただきました。これから卒業論文に取り組まれる皆様の一助となれば幸いです。

卒業論文を執筆するにあたって、学生が直面する問題は就活との両立だろうと思います。私の場合は教員を目指していましたが、教員採用試験でしたが、例にもれず就活両立問題を抱えていました。三回生後期から、四回生の八月の試験終了まで面接練習や試験勉強をしなければならぬ状況でした。さらに、五週間は教育実習もあり、この期間は実質、卒論を全く進めることができませんでした。そういった中で新しいテーマを設定し、一から始めるということとは時間的に厳しいと考えました。そこで、三回生で調べていたテーマをそのまま継続して調べ、その延長で卒業論文とすることにしました。主な資料集めや、どう論を進めていくという骨組みは完成していたため、四回生では自分の論を客観的に見つめ直し、補強していくという作業に重点を置きました。この作業には終わりがありません。調べようと思えばいくらでも調べることが出てきますし、自分の論の穴はいくらでも発見できます。それらを調べていく中で、私の要領が悪いということもあり

ますが、調べても結局論文には不要なものであったり、論点からずれて行ったりすることが多々ありました。思うように進まないことも多く、時間はかり過ぎていくことも何度も経験しました。そのようなときは、ゼミの先生にアドバイスを頂いたり、友人に相談したりすることで、新たな視点から考えることができました。

また、私はたまたま、三回生でやったことが卒論に繋がりましたが、三回生までの授業で学んだことも自分の卒論に活かしていると感じています。二・三回生で異なる時代の論文の進め方を知ること、行き詰った時に違った角度で考えることができました。そして、そもそも、私が卒論の結論について発想を得たのは三回生の教養の講義でした。面白そうだと何気なく受けた講義でしたが、自分の調べていることに繋がることが多く、夢中でメモを取ったのを覚えています。さらに、私の論文は仏教について考察する場面が多かったため、仏教学等の講義からも多くの示唆を得ました。アンテナをはっていれば普段の生活のいたるところに隠されている卒論のヒントを発見することができるかもしれません。

私の卒論執筆は、大学生活の集大成であったと思います。それと共に、さらに調べたい、学びたいと思える貴重な体験であり、

自分自身の財産になりました。

皆様がこれまでの学びの成果を十分に発揮できますよう、心よりお祈り申し上げます。

### 中島敦「わが西遊記」の構想

——スピノザの思想との関連——

児島春菜

〈論提要旨〉

中島敦は「悟浄出世」と「悟浄歎異——沙門悟浄の手記——」という二作品の末尾に、「——「わが西遊記」の中——」という言葉を付している。この二篇が未完の長編小説「わが西遊記」の一部分であったと解釈する先行研究に賛同する立場から、未完の長編小説「わが西遊記」の構想を追究することを卒業論文の目的とした。

副論文において、「悟浄歎異」の中核を担う〈所与〓必然〓自由〉という等式を中心に二篇の内容を検討した。この等式の中の「所与」という言葉が、中島の蔵書の中にあつたカール・ゲーブハルト著『スピノザ』の中で再定義された「所与」という言葉の意味を踏まえて書かれたものであると解釈すると、〈所与〓必然〓自由〉とは、スピノザの思想の目標である〈自由人〉の在り方

を表現したものであるということが分かる。更に、「悟浄歎異」の前篇にあたる「悟浄出世」においても、作品内の重要な場面において〈自由人〉を示唆する描写が見られた。以上のことから、中島はスピノザの思想に基づいて「悟浄出世」「悟浄歎異」を書いたということが明らかになった。

卒業論文本編では、「わが西遊記」全体の構想について、中島が田中西二郎に宛てた書簡から考察した。考察に用いた部分は以下の通りである。

世界〔を〕がスピノザを知らなかったとしたら、それは世界の不幸であつて、スピノザの不幸ではない、といふ考へ方は瘦我慢だと思ひますか？ とにかく、僕は、そんな積りでもつて、西遊記（孫悟空や八戒の出でくる）を書いてゐます、僕のファウストにする意気込みなり。どうして日本支那の文学者は、此の材料に目をつけなかつたのかな？ 『中島敦全集 第三巻』一九七六年九月三〇日 筑摩書房 五九七頁。「」で囲まれた部分は、一旦書かれた字句が書き消され、更に訂正か書き込みがあることを示す。）

副論文の内容を踏まえてこの書簡を見ると、中島が、スピノザの思想を「わが西遊記」によつて世界に知らしめるという構想を抱いていたということが分かった。そして、「わが西遊記」の原本

とした『絵本西遊記』の末尾の悟浄のあり方と、スピノザの思想の目標である〈自由人〉のあり方との間に、中島が共通点を見出していたという可能性が高いことが分かった。

更に、「悟浄出世」が中島自身の精神遍歴を託した物語であったということを踏まえると、中島は「わが西遊記」について、スピノザの思想に基づいた自己省察の物語とするという構想を持っていたことが明らかになった。

#### 〈論文執筆体験記〉

卒業論文を書くにあたって、私がまず初めにぶつかったのは作家選びの壁でした。私は三回生の春休みの間に研究対象とする作家の全作品を読み、テーマをある程度決定してしまおうと考えていたのですが、当初研究対象にしようと考えていた作家の作品数があまりにも多かつたことからそれを諦めざるを得ませんでした。こうして四回生の前期に対象の作家を中島敦へと急遽変更したため、ゼミの中では最も遅れたスタートを切ることとなりました。しかし、元々中島敦の作品について興味を持っていたということもあり、研究を日々積極的に行うことが出来たため、最終的には十分充実した研究内容となりました。

研究を進める中では、何よりも対象作品の先行研究の多さに圧倒されました。自分の頭の中だけでは到底整理しきれないだろう

と容易に想像出来たため、先行研究をWordで一覧にして管理しました。論文のタイトル・執筆者・出版年はもちろん、内容もまた一つ一つキーワードを絞って簡潔に記していきました。ここで役に立ったのはWordの検索機能でした。調査を進めていく上で新たに検討すべき点が出て来た際に、もう一度先行研究の研究内容をさらうという作業が何度か必要となったのですが、この機能のおかげで、新たに浮上った問題点に関連した先行研究をすぐに見つけることが出来ました。先行研究の一覧を作るという作業は多くの労力を必要としましたが、論文を執筆する上で最も重要な資料の一つとなりました。

私は対象作品を設定した際に、五つの問題点(一)「ファウスト」や「ツアラトウストラ」との関連、(二)作品の構想について、(三)作品の成立日について、(四)「悟浄歎異」末尾の「火」の解釈の「どうして日本支那の文学者は、此の材料に目をつけなかったのかな？」という言葉についての解釈)を研究テーマの候補として設定していました。この内、(四)以外の四点は後期に入っても研究を深めるための糸口が見つからなかったため、保留という形にしてひとまず(四)のみの研究を進めることにしました。そして、本文を読む内に本文中の「所与」という言葉の使われ方に焦点が当たり、中島がこの言葉を使った背景には、何らかの哲学や思想の

影響があったのではないかと考えたため、中島の蔵書を調べ始めました。ここで「所与」という言葉がスピノザの思想を踏まえたものであるということが明らかにになり、更に(四)のみでなく、保留していた四つの問題点全てについての論を展開する糸口もまた発見することが出来ました。

そして、四回生の秋頃に、峯村先生から、卒業論文の内容が複雑化しているため、本論と副論文に分けた方が良いのではないかと、という指導を受けました。私の卒業論文はその時点で規定の分量を大きく超えていたこともあり、この措置を行うことにより論文全体の流れがすっきりとしました。また、研究の中で自分が最もこだわった部分を副論文の方にまわすことにより、論の根拠をより多く丁寧な形で挙げる事が出来ました。

私は卒業論文の執筆を通して、近代文学の研究の面白さを実感しました。膨大な量の先行研究は存在しても、自分と同じ意見の研究者は数名しかおらず、更に同じ根拠を挙げている研究者は皆無であったためです。これから卒業論文を書く方達も、きつと研究を進める内にこの面白さを体感出来るのではないかと思います。

## 『曾禰好忠集』における述懐表現

— 廢屋の表現を中心に —

藤原 靜香

〈論文要旨〉

『曾禰好忠集』全体の性格が不遇述懐であるか否かについて、近年議論がなされているが、好忠の作品に不遇述懐表現が存在している事は認められるべきだろう。本論文では、先行研究で取り上げられてきた「好忠百首」序文を改めて検討し、好忠が廢屋・廢糜の様子を連続して用いている点に着目した。好忠は序文以外でも、「毎月集」中において季節ごとに廢屋・廢糜を詠じている。特に序文では不遇を示す語の前後で用いていることから、彼が述懐表現の一つとして廢屋を使用したのではないかと考え、検討を進める。

まず、好忠以前では廢屋・廢糜表現はどのように扱われる素材かを整理する。和歌では恋歌の素材として廢糜を用いる伝統があり、相手の訪れが途絶えた様子を示す事が確認できる。ほかに、好忠と同時代に登場するものとして、河原院の廢糜を詠んだ作品群がある。これは廢糜した建造物に美しさを見出す「廢糜美」の作品である。続いて、好忠の作品には漢詩文の影響があるという指摘から、漢詩文における廢屋を検討し、漢詩文では、「茅屋」

「草亭」といった表現は、自分の隠遁先の住まいを示す例が主流である事を明らかにした。

以上、廢屋には①恋歌②廢糜美③隱遁先の表現がある事を踏まえた上で、『曾禰好忠集』の廢屋・廢糜表現と比較してみると、好忠歌にはこれらに当てはまらない趣向や、従来の和歌に見られなかった語の使用が確認できる。今回、検討を行ったのは「よもぎ」と「あばら」である。検討の結果、「よもぎ」は不遇を表現する漢詩文の用法に近く、「あばら」を用いた和歌は、恋歌でありながら影響元の作品以上に廢屋を強調する意図があった。

では、こうした不遇述懐と廢屋が結びつく思想はどこから来たものなのか。なぜ好忠は影響を受けた作品以上に廢屋を強調しようとしたのか。「好忠百首」序文との類似が指摘されている申文(ここでは『本朝文粹』奏状を使用)を中心に検討すると、廢屋表現や貧しさの訴えが存在している。その表現は季密「陳情表」と類似しているが、中国では親孝行をする事が訴えの主軸であり、廢屋や家庭の貧しさは過去のものとして描かれている。また、「陳情表」の結論は官を退くことを求める事だ。対して日本では、現在の生活苦を述べ、昇進を要求している。ここに相違点が認められるだろう。加えて、申文の表現には事実と反する誇張表現があるということが既に指摘されている。ここでの廢屋・貧

しさに関する記述も、官職請願のために自らの不遇述懐を誇張した表現であるといえるだろう。その他、不遇述懐の漢詩文でも廃屋の表現が確認出来る事から、日本漢詩文では現在の不遇述懐を強調する表現として、廃屋・貧しさを述べていたと考えられる。不遇述懐と廃屋は、好忠以前の和歌では結びついていないことから、好忠は申文をはじめとする、日本漢詩文における廃屋の性格を和歌に受容することで、不遇感を強調する意図があつたのではないか。

以上から、好忠は従来の和歌にない語や表現を積極的に用いて廃屋を詠じた点、申文をはじめとする日本漢詩文で使用されてきた、不遇意識の誇張を目的とした廃屋表現を和歌に受容した点で、今までにない新しさを作品に求めたと同時に、自らの不遇を強調したと結論付ける。

#### 〈論文執筆体験記〉

曾禰好忠について研究しようと決めたまきっかけは、二回生の時に受けた講読の講義にあります。百人一首の注釈書を調査するという内容の講義で、私は曾禰好忠の作品を担当することになりました。発表するにあたり、好忠に関わる文献や先行研究を集めていた事が、卒業論文執筆に繋がりました。入学当初から、漠然と

「和歌の研究がしたい」と思っていました。この講義で好忠の和歌を詠み、和歌作品の読解には漢詩文の知識が不可欠である事に気付いて、三回生から漢文学のゼミを選択しました。大学では幅広い分野の講義を取るようになりますが、それによって得られる知識は必ずどこかで結びつきます。それこそ、講義の中で興味を持った事柄が、卒業論文に繋がるかも知れません。是非、様々な分野に興味を広げてほしいと思います。

卒業論文を執筆する上で特に苦労したことは二点ありました。一つ目が題目決定です。研究対象が決定しても、どこに焦点を合わせて研究を進めれば良いのか、大変悩みました。先行研究を整理した上で、現在論じられていることを確認すると、好忠の不遇述懐作品について論が分かれていた事が分かりました。そこで、最初は「述懐作品」という大きな枠組みで調査を始めましたが、なかなか進まず試行錯誤していたように記憶しています。そうした中で、改めて集中の述懐歌を取り出して並べたところ、「廃屋」が何度も登場することに気付きました。注釈書を突き合わせながら自分なりに解釈を考え直し、テーマを絞り始めることができました。

二つ目は、資料の収集・整理です。和歌だけではなく漢詩文まで調査範囲を広げたため資料が非常に多くなり、手元の資料がど

こにあるか、収集した用例の内容がどういったものだったのか、把握出来なくなった時期がありました。移動する際にも大荷物を抱えることになりました。そこで、コピーした用例をノートに切り貼りして、調べたことや自分なりの解釈を余白に書き込む形を取りました。併せて、資料を入手したらすぐにデータ入力する事を決めた事で、手元の資料が検索しやすくなりました。自分に合った整理の方法があると思いますが、参考になればと思います。

どんなに資料が多くても、丁寧に読まなければいけないという事を、執筆中に痛感しましたし、今でも私自身の課題だと感じています。資料調査にはとても時間がかかるので、是非早めに資料を集めることをオススメします。四回生は卒業論文に加えて進路決定で忙しい一年です。体だけは大切に、最後まで乗り切ってください。

### 小学校国語教科書における基本語彙

田中 悠里子

#### 〈論文要旨〉

これまで小学校国語教科書の語彙に関する研究がいくつか行われており、それらは主に次の二つに分けられる。一つ目は、調査する品詞を定めてその使用実態を明らかにしたもので、二つ目

は、外国人が日本語を学ぶ際に使用する日本語教科書との比較を通じて国語教科書の語彙の特徴を考察したものである。

一つ目の研究としては、山本建雄氏の「小学校国語教科書の漢語名詞語彙の実態とその指導―説明文教材における場合を中心に―」がある。阪本一郎氏の『新教育基本語彙』を基に、漢語名詞について、低学年と高学年それぞれの国語教科書に、教育基本語彙の各学習段階（A…小学校低学年、B…小学校高学年、C…中学校）の語がどれくらいの割合を占めているかが示されている。調査の結果、低学年では、Aの語が四割、Bの語が三割を占め、高学年ではBの語が四割、残りは他の段階の語が等しく分け合う形となっていることが分かった。

二つ目の研究としては、大須賀茂氏の「日本文学や文化理解のための日本語教育を考える…日本語教科書と国語教科書の語彙比較研究から」がある。調査の結果、国語教科書には、植物や動物など自然に関する名詞が多く用いられていることが示されている。その要因として、文部科学省の『学習指導要領』の中の「生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと」という教材の選択に当たって指針となる文章を引き、このような国語教科書の目的と関わると述べている。

これらの先行研究を受けて私は、次の二点について調査を行った。

一点目は、国立国語研究所において行われた雑誌や新聞の語彙調査の結果との比較を行い、小学校用国語教科書の語彙の特徴をより明らかにすることである。

二点目は、小学校の国語教科書に教育の基本となる語彙がどの程度使用されているかということである。先行研究では、漢語名詞に絞って調査が行われていたが、他の品詞も含め全体での比較を行うことで、より教育基本語彙の性質について知ることが出来ると思われる。

研究対象資料は、光村図書の小学校国語教科書計十冊とした。テキストを形態素ごとに区切られたデータに加工し、データの分析を行った。

まず、以下の点を中心に国立国語研究所の『現代雑誌九十種の用語用字』（一九六二年）及び、『電子計算機による新聞の語彙調査』（一九七〇～一九七三年）との比較を行った。

① 語種（漢語・和語・外来語・混種語）の構成。

② 品詞（体の類・用の類・相の類・その他の類）の構成。

③ 『分類語彙表』（国立国語研究所）を用いた語彙の意味分類。

次に、「教育基本語彙」との比較を行った。ここでは、阪本一

郎氏の『新教育基本語彙』（一九八四年）を使用した。

調査の結果、教科書・雑誌・新聞の三者における共通点や相違点を明らかにすることが出来た。まず、語種の比較では、教科書は、和語の割合が高いこと、また、学年が上がるにつれ和語の割合は減少し、漢語が増加していることが分かった。次に、品詞別に見ると、体の類・用の類・相の類・その他の類の順に多い点では三者で共通していた。しかし、異なり語数では、教科書は、雑誌・新聞に比べ名詞などのグループの割合が低く、動詞などのグループの割合が高くなっていた。最後に、上位七百語を意味分類別に見た場合、教科書は、雑誌・新聞と比べ、「言動」「自然物・自然現象」「心・表情・感情・感覚・知見」などの語が多く、「数量・程度」「人に準ずる主体」「主体の別」などの語が少ないことが分かった。

教科書と雑誌・新聞との間に相違が見られる原因としては、教科書を作成する際に文部科学省の『学習指導要領』の方針に従って教材選択が行われていることと、教科書が「小学生」という限られた者を対象としていることが考えられる。教科書に「言動」「自然物・自然現象」「心・表情・感情・感覚・知見」などの語が多いのは、『学習指導要領』において国語教育の目的として述べられていることと関係している。また、和語の割合が高く、漢語の割合

が低いことや「人に準ずる主体」「主体の別」などの語が少ないことは、対象が大人を含めた幅広い年代ではなく、「小学生」であるためだと考えられる。教科書・雑誌・新聞はともに、現代日本語によって書かれたものであるが、その資料の性質によって語彙の特徴には違いが見られることが分かった。

阪本一郎氏の『新教育基本語彙』との比較を行った結果、基本語彙に定められている語彙のうち、教科書に使用されていた語は、Aが五十六・九%、Bが二十七・二%であり、Cも八・七%存在していることが分かった。さらに、Aの語は低学年で学んだ語のうち、高学年でもその大部分を使用している一方で、B・Cの語は約七割から八割が高学年にのみ使用されていた。このことから、学年が上がると、高学年や中学生を対象とした語の使用が増える一方で、低学年の語彙も一定の割合を占めていることが分かる。小学校教育において、語彙指導の一つの基準となるように定められた『新教育基本語彙』であるが、実際に教育の現場で用いられる教科書にはどの学習段階の語がどれくらい使用されているかを知ることは重要であると思われる。

#### 〈論文執筆体験記〉

卒論執筆に関して私が伝えたいことは、先行研究の分析と予備

調査を早めに行うということです。先行研究の分析をきちんと行うことで、自分が研究したいことが明確になり、どうすればそれを調べられるのかについて検討できると思います。また、完璧でなくて良いので、事前に調査を行うことで、調査に必要な時間が分かり、またそこでの課題が見えてくると思います。

そして、大切なことは、最後まであきらめないという気持ちを持つことです。みなさんもこれから卒論を書く中で、大変なこともあると思いますが、絶対に最後まであきらめずに取り組み、論文を完成させて下さい。しんどいことや辛いことがあった時は、ぜひ周りの人に助けってもらいながら、体調にも気を付けて、頑張っていただけだと思います。

#### 優秀論文発表会体験記

##### 優秀論文発表会に参加して

三回生二組 加藤 怜 奈  
五月十三日に行われた優秀論文発表会に参加して、私はたくさん  
のことを学ぶことができました。

まず私が学ぶことができたと考えたことは、卒業論文の執筆を

どのように進めていくのかということ。今までの私は、卒業論文は絶対に書かなければいけない物だけれど、どんな事をどのように書いていけば良いのか分からなかったためほんやりとしたイメージしか持っていませんでした。しかし、今回の発表会に参加し、先輩方の発表を聞くことで卒業論文のイメージがはっきりとしたものとなりました。また、四名の発表された先輩方全員が三回生のうちからテーマを決定し、先行研究を読んでいたと仰っていたことから、執筆に向けて何をしていたらいいのかということも、はっきりさせることができました。

他にも、すべての授業が卒業論文に繋がっているということも学びました。これは、発表者のお一人である吉田有希先輩のお言葉です。吉田先輩は仏教学や教養科目といった国文学科以外の授業が参考になることがあったと仰っていました。その言葉を聞いて、卒業論文だけではなく、ゼミの発表などでも他の授業で聞いたことが参考になることがあったことを思い出しました。このことから国文学科の授業だけではなく、幅広く様々な分野の内容を勉強していくということが大切であることを学びました。

また、発表会が終わった後の発表者の方々の囲みでの茶話会でもたくさんのお話を勉強させていただきました。発表会の時間内だけでは聞くことができなかつた卒業論文を執筆する際の苦労や

今からやっておくべきことなど本当に為になるお話ばかりでした。卒業論文のお話だけではなく、先輩方の就職活動や教育実習のお話についても伺うことができました。たくさんのお話を聞いていく中で、来年の卒業論文執筆や就職活動などに向けて頑張っていこうという気持ちが高まりました。

茶話会では、先輩方に私が今まで抱えていた卒業論文や就職活動、教育実習などへの悩みを相談させていただきました。どの先輩方も初対面にも関わらず、親身になって聞いてくださいました。「大丈夫だよ。」と励ましてくださったおかげでこれからのことに対する不安や悩みが軽くなりました。

今回、私は優秀論文発表会に参加するのは初めてのことでした。一日でこんなにも学ぶことがたくさんあるにも関わらず、なぜ一回生の時から参加しなかったのだろうと感じました。来年は遂に卒業論文の執筆が始まります。また今年とは違う気持ちで来年の優秀論文発表会に参加したいと思えます。

最後に、今回発表してくださった先輩方、準備をしてくださった先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

## 優秀論文発表会に参加して

三回生 桑 原 陽 子

今回私がこの優秀論文発表会に参加して良かったと思う点は二つある。一つ目はテーマが自分の想像より自由だという点だ。先輩方のテーマを選んだ理由はとても面白く「そのような所から思いついたのか」と驚いた。また身の回りにある物で疑問に感じたことをテーマとしていた。私は自分の興味がある物と今ゼミで学んでいる万葉集の関わりをテーマにしたかったが、「研究を進めることができるのか」と自信がなかった。しかし、優秀論文発表会の後行われた茶話会で先輩方に相談するとそのテーマで卒業論文を書くことを勧めて下さった。普段このような話は先生方にも緊張してできず、また同級生に聞いて解決する話ではなかったのでもこのような機会があり本当に良かった。

二つ目は早くから準備に取り掛かる事である。三回生になり意識は就職活動に向けての準備になった。インターンや資格の勉強、教育実習の準備などで頭がいっぱいであった。しかし先輩方のお話を聞くと三回生でテーマが定まっていたり、先行研究をまとめていたとあった。またゼミの内容だけでなく教養の授業など学科外の授業からも吸収をすることが大切だとお話されていた。卒業論文は四回生から取り組むものという甘い考えがあった

が今からは時間を見つけて自分が興味のある分野の先行研究を読み、分析を行いたい。

ただ聞くだけではなく先輩方が途中質問に答えてくださりゆくりとお話する機会もあって、とても有意義な時間を過ごすことができた。また先輩方と先生の討論も聞くことができ、内容に追いつくことが出来ない部分もあったがとても面白かった。自分が一年後同じレベルの論文が書けるか不安になったが、先生や先輩方から卒業論文の進め方についてとても詳しく話してください、不安がやる気へと変わった。余裕を持って計画的に進めていきたい。

そして印象に残っている言葉がいくつかある。児島春菜さんの「先行研究の数だけ見て諦めるのではなく、自分の意見を示す」と「違和感を大切にしろ」という言葉である。レジユメの準備やレポートを書く間はとても孤独で諦めたくなる作業が続く。そして卒論は今まで自分が書いてきたレポートとは比べることができない量で未知の世界だ。しかし、その作業を乗り越えてこそ得る物は自分のこれからの人生に大いに役立つのではないかと感じた。私は普段苦勞を避けて物事を行いがちである。しかし大学を卒業したらこんなにもたくさん資料や教材が整った環境で勉強する機会はない。そして好きなものをいくらでも学ぶ事ができ疑

間を感じたことを丁寧に指導して下さる先生方がいる学生の間には、沢山のことを学びたいと思った。また吉田有希さんが「京都の文化を大切に」とおっしゃっていた。私がこの京都女子大を選んだ理由のひとつに「様々な文学作品の舞台となった京都の地の利を生かした学びが出来る」という理由があった。自分がこの大で学ぶ意味を再確認することができた。残り二年間の学生生活、すべてのことに後悔がないよう取り組みたい。

## 春季公開講座体験記

### 公開講座に参加して

三回生 上 田 薫

今回の公開講座は、山上憶良と山上憶良を慕う国府官人について廣岡義隆先生にご講演していただきました。ご講演の内容は、一つ一つが分かりやすく、大変勉強になりました。私は、その中でも山上氏という氏族ついて、そして中心的に取り上げられた『万葉集』巻十六の「筑前国志賀白水郎歌十首」の左注についての感想を述べさせていたどころかと思いません。

まず、「山上」という姓をもつ人物は、山上憶良を除けば五名

しか確認できないそうです。この事実は、当時の貴族社会で「山上氏」が認知されない位置づけにあったことを示しています。このような身の上であった「山上氏」の山上憶良が、なぜ従五位なり国司になれたのか。それは山上憶良が遣唐使になったためだそうです。当時、遣唐使船は行きも帰りも命がけであったといえます。そのような危険が伴う遣唐使になったことが、山上憶良が和歌らしからぬ題材の歌を詠む背景の一つになったのではないかと思います。

次に、「筑前国志賀白水郎歌十首」は、対馬に行ったまま帰らない荒雄を待つ妻子の気持ちになって詠んでいます。左注にはこの歌の背景が書かれており、内容を要約し、五つの部分に区別すると次のようになります。

①神亀年中に、大宰府は筑前の宗像郡の宗形部津麻呂を対馬に食糧を送るための船の船長に指名した。②津麻呂は湊屋群志賀村の海人であった荒雄のもとに行き、「ちよつと頼みがある。聞いてくれないか」という。荒雄は「私は住む郡はあなたと違いますが、長い間同じ船で航海してきた。志は兄弟よりも篤い。一緒に死ぬことはあっても、あえて辞するものではありません」と答える。津麻呂が言うには「大宰府の役人に、船長に指名されたが、年衰えていて海路に耐えられない。代わってくれないか」とい

う。③荒雄は承諾して肥前国松浦県的美祢良久の崎から出航し、対馬に向かっていると、たちまちに暴風は雨をさえ交え、ついに順風を得ないまま船は海中に没した。④こういう次第で妻子達はこの歌を作った。⑤別伝によると「筑前の国主である山上憶良臣が、妻子の痛みに悲しんで思いを述べてこの歌を作った」という。」

この①②③の部分は国府官人が書いたもので、④の部分は山上憶良が書き、そして⑤を受けて国府官人が書いた部分が⑤の部分だと廣岡先生は指摘されました。④の部分で山上憶良が、「妻子が作った」としているのは、山上憶良が「この歌は妻子に与えたもので、もう自分から離れたもの」という意識を持っていたからだと思います。この歌や左注からは、山上憶良の人柄と、国府官人からどれ程慕われていたのかが分かりました。

山上憶良は、「子等を思う歌」や貧者の困難な生活を詠んだ「貧窮問答歌」、そして荒雄に置いていかれた妻子の気持ちになつて詠んだ「筑前国志賀白水郎歌十首」などの歌に見られるように、和歌ではあまり詠まれないような題材を歌に取り入れていきます。これらの和歌のように、和歌の世界で極めて珍しい、特異な歌を詠んでいた山上憶良が、周囲の人物とどのような関わりを持っていたのか。その一端を今回の公開講座から知ることができ

ました。

### 春季公開講座に参加して

三回生 山本 瑞稀

山上憶良とはどんな人物だったのだろうか。私知っていることと言えば、「貧窮問答歌」をはじめ『萬葉集』に歌が残る歌人であるということぐらいだ。

今回の公開講座は『憶良の生き様——山上憶良を慕う国府官人から』というタイトルで廣岡義隆先生に講義をしていただいた。『萬葉集』の巻十六の「筑前国志賀白水郎歌十首」とその左注を中心に憶良という人物を見ていった今回の講義で、私は憶良がどのような人物であったのかを感じ取ることができたように思う。

「筑前国志賀白水郎歌十首」にはこれらの歌がどういうものであるのかを説明している長い左注がついている。左注の内容をまとめると、以下の通りである。

対馬に食糧を運ぶ船の舵師に選ばれてしまった津麻呂であったが、老いを理由に知り合いの荒雄に自分に成りすまして舵師をしてもらうように頼む。それを荒雄は快く引き受けるが、荒雄の乗った船は海中に沈んでしまう。それによって、荒雄の妻子らが荒雄を恋しく思つてこの歌を作った。或いは筑前国守の山上憶良

が妻子の思いを悲しく思つてこの歌を作つた。

左注の「荒雄の妻子らが荒雄を恋しく思つてこの歌を作つた。」という内容が、憶良によつて記された（記させた）部分であり、「或いは筑前国守の山上憶良が妻子の思いを悲しく思つてこの歌を作つた。」という内容が、憶良が記させた後に随伴の官人が加えたものだろうというのが、廣岡先生のご指摘であつた。また、歌の中に「八歳を待てど来座さず」という表現から、船が沈んだ事故は憶良が赴任前に起きていることがわかり、他の資料も含め考えると、憶良が国内巡行で民情視察の際に母子家庭の経緯を聞いたが、行政上は何とも救いようがなかつたため、母子の気持ちになつて歌を作ることと慰めるしかなかつたという事が推測される。また、当時の人々は一般に文字を読むことができないので、随伴の官人が憶良の歌を詠みあげて解説したと考えられるといふご指摘もあつた。

以上の事から、「筑前国志賀白水郎歌十首」は、山上憶良が夫を失つた妻子を不憫に思つて詠んだ慰めの歌であることがわかつた。私はこの歌の特異性として、身分の高い人でもなく、親しい（歌を贈るような）間柄というわけではない庶民に贈つたものであるという事が挙げられるように思う。憶良はそのような人々に心を痛めて「自分にできる慰めを」と歌を送つた。しかも、この

歌を自分が詠んだものではない（代作）という立場をとつてゐる。こんなにも、庶民に心を寄せ、思いやる歌人を、私は他に知らない。山上憶良とは、庶民に寄り添う歌人であり、寄り添うことが彼の生き様だつたのだろう。

和歌は、美しく趣のある世界や、時代が下れば幽玄な世界を詠んでゐるもの等が高く評価される。そんな中、憶良の庶民に心寄り添つた歌は次第に埋もれて行く。しかし、美しい世界だけではない憶良の歌の中の思いは、美しく趣のある世界を詠んだ歌に勝るとも劣らない価値があると感じた。

二〇一六年度 論文題目

中 古

修士論文

『伊勢物語』二十三段考

池添 栞

— 王朝の美意識に基づく二人妻評論 —

『伊勢物語』にみえる「心地」

倉田 実来

『車僧草子』の構想 — 謡曲〈車僧〉を乗りこえて —

久田 麻未

— 初段・十三段・百二十五段の恋と死 —

統語論的に見た助詞「へ」の

黒星 淑子

『源氏物語』における星の使い方について

小谷 真奈

『竹取物語』の天人像についての考察

島田沙樹子

「花」に見る『源氏物語』の人物造型

中島 涼香

— 「桜」と「女郎花」を中心に —

平安時代における女性が弾く琵琶の変遷

中村 早江

— 『源氏物語』を中心に —

『蜻蛉日記』における兼家の影

永田 実穂

— 兼家との贈答歌を中心に —

『更級日記』の「おもしろし」

林 由理

— 作者の自然に対する関心という観点からの考察 —

『源氏物語』「夕顔」色彩考

前田 絢香

— 「白」の多用と「紅」の挿入 —

「さうぜん」考

山下 梢

— 『堤中納言物語』「蟲めづる姫君」の解釈をめぐって —

卒業論文

上 代

「万代」「八つ代」表現から見る元正天皇歌

櫻田 実季

— 一六三七、四〇五八番歌を中心に —

大伴田村大嬢の歌九首

仲山 遥香

藤原公任の歌論 — 『新撰髓腦』を中心に —

安坂 優希

「なれし袖」について―大君と薫の関係から考える―  
「かかるをりにや」考

―『伊勢物語』十三段の男の葛藤―

中世

『落窪物語』の冒頭部に関する一考察

執着・嫉妬・愛欲などの報いによる蛇身譚について

―中世を中心に―

『梅松論』における足利家臣団

―「忠節」的描述を通じて―

柴右衛門話についての検討

―資料の形態と時代に注目して―

平安時代以降の兎の捨身説話の系統について

―直談系の法華経注釈書を中心に―

『今昔物語集』巻第十四第三考

―『大日本国法華経験記』巻下第一廿九と比較して―

御伽草子『浦島太郎』考―玉手箱と乙姫―

山伏の祈禱とその効果―観客の意識を中心に―

主従言葉争い物に出てくる和歌について

―狂言「花あらしひ」を中心に―

相曾 茉佑  
安本 智美

狂言に見る中世の福神信仰  
左近三郎の人物像について

―『文荷』と『左近三郎』を中心に―

狂言「こぜざとう」における笑い

くはなれこぜがもたらす効果く

狂言の笑い―太郎冠者を中心に―

狂言「腰折」考―山伏狂言における特異性―

狂言における女性像く中世の夫婦関係を中心にく

「比丘真」の笑い

―名付けと小舞「鎌倉の女郎」を中心に―

楠木 利紗

近世

中島 李夏

『傾城島原蛙合戦』第三段論

―幡楽の人物像と自害の場面の特色―

西田ひかる

『心中天の網島』における遊女小春の女性像

―「女土士の義理」を中心に―

渡辺 伶奈

『基督太平記』考

―近松の人物造形が作品にもたらす効果―

後谷 美羽

『心中天の網島』における「菅原道真」の

大森 加菜

イメージがもたらす効果とその独自性

岡田 有奈  
片本さゆり

仲嶺 美穂

樋口 友香

日南田みのり

藤見 円香

吉田 有希

石戸 明子

安藤 菜摘

伊藤 遥香

裏川真理菜

— 近松の他の心中作品と比較して —

『好色一代男』における遊女夕霧の描かれ方について 小林真路美

— 『好色一代男』の他の遊女や他作品との比較を中心に —

近松世話物作品において道化役が担う

「滑稽」の演出法とその作品への効果について 島田 香織

— 『心中天の網島』を中心に —

『薩摩歌』における近松の独自性について 瀬風 紗希

— 『好色五人女』巻五「恋の山源五兵衛」と比較して —

『心中天の網島』における小春及びおさんの人物像 西村聖里奈

— 江島其嶺『傾城禁短気』の登場人物との比較を中心に —

『女殺油地獄』における 瀨木 葵

— 与兵衛の人物像と心情変化の有無 —

— 周囲の人物との関係から — 東又みのり

『心中重井筒』における妻お辰の人物像

『今宮の心中』における 藤田 紗永

— 心中に至るまでの要因について —

— きささの心情を中心に — 藤本なつみ

『雨月物語』『蛇性の姪』における

— 『万葉集』利用の検討を通して — 太刀の役割と真名児の心情

蕪村俳画『相撲図』における蕪村句の解釈

— 他の四句と相撲の絵に関連付けて —

『出世景清』における

能『安宅』の撰取の方法とその効果について

— 近松門左衛門を中心とした他の人形浄瑠璃作品と比較して —

『心中宵庚申』半兵衛考 — 『ふたつ腹帯』と比較して — 山上 里桜

## 近 代

小川未明「眠い町」論

「外科室」の舞台設定 — 小石川植物園に関する考察 —

「嵐」と藤村童話

三宅青軒「奔馬」における独自性

— 主人公探花の人物造形を中心に —

泉鏡花「外科室」のヒロイン像

— 髪型という観点から —

泉鏡花「義血侠血」における色彩

— 〈白〉の女と〈紅〉の業 —

中島敦「わが西遊記」の構想

— スピノザの思想との関連 —

梶井基次郎「雪後」論 — 空の描写について —

古川依久美

山上 里桜

山本 奈美

末次 桜子

大島 朋音

岡畑 有希

尾上 弥那

加藤里佳子

久保 静香

児島 春菜

三宮 亜美

- 「赤い蠟燭と人魚」の考察―人魚のモデルを中心に―  
 羽田つかさ
- 田沢稲舟「五大堂」における花園女史の人物像  
 番匠 遥
- 泉鏡花「外科室」論  
 牧 幸歩
- ―ヒロインの藤色の衣の持つ意味について―  
 箕浦 翔子
- 泉鏡花「外科室」で描かれる恋愛  
 宮崎 芙美
- ―鏡花が持つ恋愛観の独自性―  
 山田ひとみ
- ―幻想の中の近代医学に携わる人物―  
 長尾 恵
- 江戸川乱歩「陰獣」論  
 浅岡由香利
- 糸山秋子の恋愛観  
 市川 彩稀
- 夢野久作「卵」論―「ある結果」は訪れたか―  
 井本 麗
- 太宰治「千代女」論―母の役割と和子の自己像―  
 大倉 璃子
- 怪盗二十面相の魅力―怪盗クインと比較して―  
 奥田真依子
- 星新一「処刑」論―「処刑」に描かれる生と死―  
 小野田優理
- 尾崎翠作品にみる妹  
 熊倉優佳子
- ―「アップルパイの午後」を中心に―  
 小湊 美希
- 「Kの昇天―或はKの溺死」論  
 尾崎翠「瑠璃玉の耳輪」論―変装と性の超越―  
 宮沢賢治「月夜のけだもの」論  
 山内 千波
- 坂口安吾「女体」論―精神と肉体の二面性―  
 吉屋信子『花物語』における死と純潔について  
 佐藤万由子
- 太宰治「陰火」論―「尼」の幻想性を中心に―  
 澤井 柚里
- 芥川龍之介「蜜柑」論―乱落する「蜜柑」の意味―  
 清吾 彩子
- 太宰治「おしやれ童子」論―借衣と仮面について―  
 高橋沙希子
- 梶井基次郎「桜の樹の下には」論  
 時田 知佳
- ―書簡から見る梶井と作品の関わり―  
 梶井基次郎「檸檬」論―丸善に注目して―  
 仲田 愛
- 小川未明「めくら星」論―子どもの死と星について―  
 比良美千翔
- 三遊亭円朝「死神」論  
 藤原 優穂
- 尾崎翠「こほろぎ嬢」論―こほろぎ嬢は何者か―  
 松嶋 亜季
- 太宰治「雌に就いて」論  
 松本 佳奈
- ―作品にみる女性表象と『若草』に発表した意図―  
 宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」論  
 向田ひかる
- ―『注文の多い料理店』「序」と広告ちらしに注目して―  
 尾崎翠「無風帯から」論  
 森山 愛加
- ―「僕」の妹への愛情について―  
 夢野久作「瓶詰地獄」論  
 安田 千尋
- ―作品から乖離した研究および久作と綾子の関係について―  
 宮沢賢治「月夜のけだもの」論  
 山内 千波

漢文

『式子内親王集』にある花の和歌について

赤石のりこ

方言と共通語の使い分け意識について

江見 杏

紀貫之における和歌表現

五十嵐千穂

—京都女子大学生へのアンケート調査をもとに—

小倉 沙織

—「ふたつなき物と思ひしを」の歌をめぐる—

京都府丹後方言について

蒲田 真希

小野篁の漢詩について

藤田加奈子

—中学生へのアンケートをもとに—

楠木 奈々

『曾禰好忠集』における述懐表現

藤原 静香

発達段階におけるオノマトペ

鎌田 愛子

—廃屋の表現を中心に—

前田 詩織

—中学一年生へのアンケートを中心に—

川名亜友美

梅の〈香〉表現と詩歌—上代から平安前期にかけて—

山岸 千尋

滋賀県日野町の方言—中学生へのアンケートをもとに—

北浦 万澄

平安詩歌に詠まれる鶴—舞う鶴を中心に—

山本賀奈子

徳島県上郡地域の方言について

小坂なつみ

紀貫之の和歌における雪

青島 千佳

—高校生へのアンケートをもとに—

才ノ平裕巳

—白髪と雪の関わりを中心に—

井原 香澄

兵庫県播磨地域における

佐野 和

国語学

中学生における敬語認識と使用状況

足立 涼香

—高校生へのアンケートをもとに—

白石 苑子

—アンケートをもとに—

食べ物におけるオノマトペ

白石 苑子

文学作品における京ことば

井原 香澄

—東海林さだお氏の作品より—

白石 苑子

—舞台となる地域別に見る—

大学生の敬語の使用状況

白石 苑子

湖東地域の方言について

大学生の敬語の使用状況

白石 苑子

—中学生へのアンケートをもとに—

大学生の敬語の使用状況

白石 苑子

—京都女子大学生へのアンケートをもとに—

岡山県の方言について

—高校生へのアンケートをもとに—

雲伯方言と東北方言—ズーズー弁による比較から—

語義の縮小—「ゆゆし」「かなし」「をかし」を中心に—

外来語について—アンケート調査をもとに—

児童書におけるオノマトペ

—対象となる読者の年代での比較—

丹後方言の現状—高校生へのアンケート調査から—

若者言葉とメディアの関わり

—大学生へのアンケート調査から—

長崎県の方言使用の現状

文学作品における京ことば

—助動詞の敬語表現を中心に—

尾崎紅葉「金色夜叉」の名詞における

「一語—多表記」について

—親族名称・親族呼称を中心に—

属性別にみた社会人の

あいさつ言語行動の違いについて

—社会人男女七〇人のアンケートをもとに—

差別語についての意識調査

—大学生・高校生へのアンケートから—

明治期の『人魚姫』比較分析

—キャラクターを形成する言葉—

京都の地名表記におけるローマ字のつづり方

—外国人向け表記としてのローマ字—

「断り」の表現からみる

嘘や言いわけに含まれた配慮表現の分析

日本語オノマトペとその英語訳の対応

—宮沢賢治の作品を用いて—

接尾語「る」による動詞化の変遷

終助詞的な「ので」の用法について

—永野氏の論文を先行研究として—

小学校国語教科書における基本語彙

大学生の「話す」「聞く」についての意識と現状

非言語を含むあいづち表現の男女差

—トーク番組におけるゲストのあいづち使用の実態—

SNS・口頭における

インターネットストラングと若者言葉

義務教育期間における敬語教育の実態

井上奈美香

岩崎 風歌

大西 香瑠

川真田千尋

久門 諒子

高井 麻衣

竹中真奈美

田中悠里子

西原 富貴

藤岡枝里子

八木 朋美

柳本 結紀

乾 瑞希

伊治 百香

山口満奈美

松本 愛奈

本庄真理子

廣嶋 亜美

野口 梨賀

中口 葵美

上村 夏帆

爲國 沙耶

須田 千里

大学生の言葉遣いについての意識と理解

—「乱れ」と「変化」の関係性—

山本 夏実

大学4学年の国語に対する

意識と知識の変化・関連性

吉岡巴奈子

—京都女子大学文学部国文学科の学生を中心に—

## 民俗学

杭全神社と庶民信仰—平野郷社縁起を中心に—

今井 桃花

『鞍馬蓋寺縁起』研究の一考察

菊地 莉緒

小泉八雲と『怪談』

坂田 彩花

「八朔」行事と庶民信仰

阪本 瑞歩

蛸地蔵尊と庶民信仰

道古 幸奈

八幡信仰と放生会

脇坂 彩

—若宮八幡・先祖八幡・地主八幡を中心に—

## 『女子大國文』 投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

集事務局まで連絡すること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

## 編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・中前正志

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果二点が掲載となりました。また、廣岡義隆先生に公開講座での御講演内容を御寄稿賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(山中・池原)